

大学教職課程における講義ルーブリック作成の実際

三浦 和美*, 渡会 純一*, 伊勢 恵*, 山下祐一郎*

*東北福祉大学教育学部

要旨: 近年, 大学講義において学生の学びの質向上の観点からルーブリックの活用が推奨されている. 特に, 小学校教員養成を行う教職課程を有する大学では, 大学教育での学習経験と教育現場との接続を意識する必要があり, ルーブリック評価の実施は喫緊の課題となっている. 多くの大学ではコモンルーブリックが整備されている一方で, 各講義において教員の創意によってルーブリック作成が認められている. しかしながら, 個々の講義のルーブリックの例示も少なく, 教員自身が作成方法についても熟知しているとは言いがたい状態である. そこで, 本研究では, 小学校教員養成を行う教職課程における教科教育法(社会科教育, 音楽教育, 英語教育)及び教育情報の4つの講義で, 松下ら(2015)が示したルーブリック作成の型を活用し, 各講義のルーブリック作成を行ったことを報告する.

キーワード: 大学教育, 小学校教員養成, ルーブリック作成, 教科指導法, 教育情報

1. 研究の背景と目的

近年, 大学講義において学生の学びの質向上の観点からルーブリック評価が推奨されている⁽¹⁾. 文科省(2016)は, 授業における質の保証について具体的に考えることが必要として, 例えば, シラバスとルーブリックをセットとしたクラス運営などを提起している. ルーブリックとは, 「1) 「目標に準拠した評価のための「基準」つくりの方法論であり, 学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準をマトリクス形式で示す評価指標であり, 2) 学習者の「パフォーマンスの成功の度合いを示す尺度と, それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を説明する記述語で構成される, 評価基準の記述形式」として定義される評価ツールのことである(濱名 2012)⁽²⁾. これらの背景を基に, 学生の学びの意欲喚起や学習成果の自己点検の観点から, すべての講義で使用できるコモンルーブリックが整備されている大学もある⁽³⁾.

しかし, 大学の教員養成課程においては講義のルーブリックの例示も少なく, 教員自身が作成方

法について熟知しているとは言いがたい状態であり, シラバスとルーブリックをセットとした運営を行うためには, 各自担当する講義で使用するルーブリック作成が必要とされていた. 特に, 2020年度から完全実施を迎える小学校学習指導要領⁽⁴⁾に基づいた教員養成に対応するルーブリックは見当たらない.

そこで, 社会科教育, 音楽教育, 英語教育, 教育情報学を担当する筆者らがルーブリックについて文献研究を基にしながら, それぞれ担当する講義で使用するルーブリックを作成することとした.

本研究では, 担当する講義の目標とルーブリック作成の意図の2点からルーブリック作成の経過を述べ, 4つの講義のルーブリックについて報告する.

2. ルーブリックに関する先行研究

もともとルーブリック(Rubric)は, 「(印刷物などの)朱書き, 赤刷り原稿・書物・法令などの昔は朱刷りされた標題, 項目, 見出し」である⁽⁵⁾.

中世の時代には、ルーブリックは法律や典礼に付記された一セットの指示なり注釈であり、それらは特に朱書きされていた。このため、人々に権威をもって何かを指示するものを意味するようになったという⁽⁶⁾。このように古くは法令や儀式で使用されていた歴史的な意味を持つことばが、なぜ、今日教育現場で使用されるようになったのかについて検討する。

高浦(2004)によれば、ルーブリックによる評価が教育現場で求められるようになった背景には、1970年代以降アメリカにおいて、学校の説明責任に対する社会的要求が高まったことがあり、各種の標準化されたテストを中心に子どもの学習結果を評価しようとする動きが顕著になったことが挙げられる。しかし、このようなテスト体制の結果、やがていろいろな弊害が指摘されるようになり、その代替としてポートフォリオ評価が登場するようになったと指摘している⁽⁷⁾。我が国においてもこれまでの客観テストによる評価方法は、知識・理解を判断するのには向いていたが、思考や判断、または、表現・説明などのプレゼンテーション能力、いわゆるパフォーマンス系の評価はこれまでの客観テストでは難しくなったことからルーブリック評価を用いるようになった。近年では、前述のとおり、大学教育においてもその使用が奨励されるようになってきている。

次に、ルーブリックの作成方法について概観す

る。まず、安藤(2008)は、一般的なルーブリックの必要性を述べている⁽⁸⁾。それは、我が国の目標標準拠評価(いわゆる絶対評価)は、単元ごとにルーブリックが異なり、子どもだけでなく教師さえルーブリックを十分理解できず、使いこなせていないという現状があることを指摘している。一方、アメリカでは、学習活動に注目し、それぞれの評価規準にそって質的レベルの評価ができるルーブリックを使って成果を挙げていることを報告している。論文のなかでアメリカにおける小中高教員(初任者を含む)の一般的ルーブリックの活用例を紹介している。一般的なルーブリックについては、検討の余地があると考えられた。

また、黒上らの研究するルーブリックでも、表1に示すとおり、縦軸に複数の評価項目を置き、横軸にはその到達レベルをS・A・B・Cの4段階で定義している⁽⁹⁾。黒上らが評価の段階として示しているのは、S:期待する思考活動以上に、何か+αが見られる、A:十分満足できる(期待する思考活動が十分見られる)、B:概ね満足できる(期待する思考活動は見られるが、未達成の部分もある)、C:努力を要する(期待される思考活動が見られない)の4つの段階であり、学びが各教科項目のどのレベルまで到達しているかを測ることでブレのない、客観的な評価が実現可能であるとしている。

表1 ルーブリック(黒上論文に掲載された表を第1筆者が作成した)

項目	S	A	B	C
評価項目(1)	評価基準	評価基準	評価基準	評価基準
評価項目(2)	評価基準	評価基準	評価基準	評価基準

しかし、こうしたルーブリックは、汎用性が高いものの、個々の講義でまた新たにルーブリックを作成する手間が必要となる。

そのため、次に、沖(2014)⁽¹⁰⁾による加点法と減点法を検討した。表2に示すとおり、「芸術論特殊講義」第二段階のルーブリックは、加点法で作成されている。評価指標「企画趣旨に対する自らの考えを述べることができる」に対して、企画趣旨に対する自らの考えを適切に述べていない0

段階は0点であり、1から3の段階ごとに加点が設定されている。

この方法では、採点の一貫性と公平性が確保されたことやレポート形式に関するミスが激減し、学習活動への学生の関与を示すルーブリックの効果を再確認されたと述べている。

また、沖は、表3に示すとおり小レポート課題のルーブリックでは減点法を採用している。この方法は、ミスの多い学生は小レポートを提出した

表2 「芸術論特殊講義」第二段階のルーブリック例⁽¹¹⁾

(課題) 展覧会を見に行き、企画趣旨について自らの考えを述べるとともに、美術史の用語を用いて気に入った作品5点について批評しなさい。なお、レポートは5000字程度にまとめて、パンフレットとともに提出すること。なお、展覧会を見に行っていない場合やパンフレットが同封されていないばあい、あるいはレポートが提出されていない場合は0点とみなす。				
評価指標	0	1	2	3
企画趣旨に対する自らの考えを述べることができる。	企画趣旨に対する自らの考えを適切に述べていない (0点)。	いくつかの間違ひはあるが、企画趣旨に対する自らの考えを最低限述べている (1~5点)。	大きな間違ひがなく、企画趣旨に対する自らの考えをほぼ適切に述べている (6~10点)。	完璧に企画趣旨を読み取り、それに対する自らの意見を適切に述べている (11点~15点)

(沖の論文 P84 から一部抜粋して第1筆者が作成した。あと4つの項目は省略した。)

にもかかわらず0点になることもあることが報告されている。優秀なレポートの紹介や各自の得点のフィードバックなどきめ細かな対応をとることによってミスが激減し、求められる学習活動への学生の関与が強められるようになってきている。加点の幅が段階に応じて増加していることが分か

る。

加点法や減点法は評価のしやすさはあるものの、項目ごとに評価指標との整合性を図り、加点あるいは減点の配分を綿密に設計するという煩雑さがある。

表3 「現代の教育」小レポート課題の第二段階ルーブリック⁽¹²⁾

(課題例) あなたは、日本の子どもたちの学力や学習意欲が低下した原因には、学習指導要領を除いてどのようなものがあると考えますか? 3つ考えられるものを挙げ、その理由を述べてください。

1. 3つの原因が挙げられており、その理由が述べられているか
 - 1つしか挙げられていない 2点減点
 - 2つしか挙げられていない 1点減点
2. 原因について深く考察できているか
 - 授業で取り上げたものを反復してあるだけ 1点減点
 - 理由がいい加減であったり、一人よがりの見解が書いてある 1点減点

(沖の論文 P86 から一部抜粋して第1筆者が作成した。あと1つの項目は省略した。)

一方、松下ら (2015) は、ルーブリックレベルの設定方法を大きく4つに類型化⁽¹³⁾していることに着目した。表4に、松下らの著書にあるルーブリックの型に関する解説をルーブリックの型と記述に分けて示した。松下らによれば、ルーブリッ

クの作成の型には、条件をだんだん増やしていく「条件型」、数量を示す単語や句を使って、数量をだんだん増やしていく「数量詞型」、動詞を使って、望ましさの程度をだんだん高めていく「動詞型」、形容詞・副詞を使って、望ましさの程度をだんだ

ん高めていく「形容詞・副詞型」などがある。
この方法は、それぞれ特性の異なる講義においてルーブリック作成の根拠を明確にし、さらに、

講義の特性に合わせて条件や数量詞などを検討することで作成できる点に特徴がある。

表4 ルーブリックレベルの設定方法(松下ら2013)

ルーブリックの型	作成の方法
条件型	条件をだんだん増やしていく
数量詞型	数量を示す単語や句を使って、数量をだんだん増やしていく
動詞型	動詞を使って、望ましさの程度をだんだん高めていく
形容詞・副詞型	形容詞・副詞を使って、望ましさの程度をだんだん高めていく

3. 方法

3.1 研究対象となる講義

研究対象となる講義は、小学校教員養成を行うTF 大学教職課程で行われる4つの講義「社会科の指導法」、「音楽科の指導法」、「英語活動の指導法」、「教育情報」である。いずれも一般の講義と比べて知識の習得に留まらず、学生が取り組む活動を重視している点に違いがある。ルーブリックを作成する2017年4月初旬で受講生は、いずれの講義も未定である。

3.2 研究の計画

本研究の計画は以下のとおりである。

2017年2月～3月	講義シラバス作成
2017年3月	次期学習指導要領についての議論、ルーブリックに関する共同研究
2017年4月初め	ルーブリック作成とピアレビュー検討
2017年4月7日以降	講義でルーブリック使用(学生による事前の自己評価)

3.3 手続き

ルーブリック作成の手続きは、以下のとおりである。

まず、本研究におけるルーブリックの定義は、「学習者の「パフォーマンスの成功の度合いを示す尺度と、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を説明する記述語で構成される、評価基準の記述形式」であり、その適用範囲は前期15回の講義全体とする。

各自シラバスを作成後、2020年度から実施され

る学習指導要領の認識を著者らで議論し、次に、各教科等の担当者がルーブリックの素案を作成する。その際、前節で述べた松下らのルーブリック作成方法は、条件や数量詞などを検討することで作成が可能になる点が他のルーブリックより優れていると考えたため今回採用した。最後に、著者らで素案のピアレビューを行う。先行研究で概観してきたようにルーブリック作成にはいくつかの型があり、それらを講義の特性に合わせて活用する。作成後、ルーブリックピアレビュー検討を行う。

3.2に示した事前の自己評価を行うのは、講義概要及び講義目標を理解し、何を学んで何ができるようにするかを学生自身が確認できるようにするためである。

4. 結果

本研究で対象となったのは、第1筆者担当の「社会科の指導法」、第2筆者担当の「音楽科の指導法」、第3筆者担当の「英語活動の指導法」の教科教育法3講義と第4筆者担当の「教育情報」の4講義であった。各講義においてシラバスとルーブリックがセットとなるよう、松下らが示した講義目標に対して望ましさの程度を高めていくルーブリックの作成方法を取った。「社会科の指導法」では、条件をだんだん増やしていく「条件型」、「音楽科の指導法」では、「動詞型」「形容詞・副詞型」、第3筆者が担当する「英語活動の指導法」では、「形容詞・副詞型」を活用した。

また、「教育情報」に関する講義において、主に情報機器を利用した指導方法に関するルーブ

リックを作成した。ここでは、情報機器を利用した指導の可能を最終目標とし、同じく松下らが示した徐々に条件を増やしていく「条件型」とした。

以下に4つの講義におけるルーブリック作成の実際について報告する。

4.1 「社会科の指導法」におけるルーブリック作成の実際

(1) 本講義の目標

本講義は、3つある小学校社会科教育法の講義のうち、社会科概論に次ぐ2つ目の講義「社会科の指導法」である。ここでは、社会科の指導方法の具体について学ぶ。評価の観点は次期学習指導要領の評価の観点（【知識・技能】【思考力・判断力・表現力】【学びに向かう力・人間性】）に対応させた。次期学習指導要領は、小学校・中学校・高等学校の全ての教科で評価項目が統一されることとなったため、大学講義においてもこれを意識した取り組みが必要となると考えたからである。

本講義の目標は、以下の3点である。

【知識・技能】 社会科年間指導計画の立て方・小学校社会科の教科書の内容・学習指導案(略案)の書き方等を理解するとともに、授業構成に必要な様々な情報を効果的に調べ、学習指導案としてまとめる技能を身に付けるようにする。

【思考力・判断力・表現力】 社会的事象の意味を考察し、授業づくりに必要な事柄について適切に判断し、授業(10分間)として実施することができる。

【学びに向かう力・人間性】 社会的事象について、よりよい社会の実現を視野に入れて学び、主体的に授業づくりや授業の振り返りを行うことができる。

目標に示すとおり、本講義では、社会科年間指導計画の立て方・教科書の内容・学習指導案(略案)の書き方等を理解するとともに、授業構成に必要な様々な情報を効果的に調べ、学習指導案としてまとめる技能を身に付けられるよう、学生が主体的に行う活動が中心となる。

(2) ルーブリック作成の意図

表5に示す本講義のルーブリックは、松下らのルーブリックレベルの設定方法のうち、条件をだんだん増やしていく「条件型」によって作成された。段階は数字で5段階とした。「社会科の指導法」の特性は、授業づくり未経験の学生が15回の講義で模学習指導案略案を作成し、模擬授業ができるようにする点にある。そこで、講義の進捗につれてクリアすべき条件を増やしていくことによって、目標達成の度合いを学生自身が理解できると考え、「条件型」を選択した。

まず、知識・技能の項目を見てみる。1の段階は、講義の目標に対して、学習指導案略案の書き方に関する知識を習得しておらず、10分間の模擬授業を行うこともできないという状態を示している。次の2の段階では、1の段階に学習指導案略案の書き方に関する知識を習得しているという一つの条件を示している。さらに、次の3の段階では、10分間の模擬授業を行う技能を有しているというもう一つの条件を付け加えている。4の段階では、さらに、資料や発問のいずれかを工夫していると条件を増やしている。最後の5の段階では、資料と発問を工夫しているという条件を付け加えている。5の段階が本講義における望ましい学生の姿・到達すべき姿として捉えている。

残りの思考力・判断力・表現力と学びに向かう力・人間性の評価の項目もこれと同じく条件型で作成された。

また、各段階は、条件に注目するだけで教員が評価を行うことが容易にできるように構成されているが、その根拠となる学生の自由記述も同時に表記できる欄を設けることとした。それは、講義を通して自己の成長を感じ、学びに対して主体的に取り組もうとする姿を自分自身のことによって確認できるようにしたいと考えたからである。そのため、自由記述の欄は、事前と事後の2つを設定した。講義の冒頭で書いた自分の評価に対して、自分自身が講義を振り返ったとき自分の成長を感じることで次の学びに向かう姿勢が醸成されることを期待したい。ルーブリック評価をそうした観点で学生が自己の変化に気づくことができ使用しやすいものであることも条件として考えた。

なお、小学校社会科に関する確認テストも として、
ルーブリック評価と同時に事前事後2回行うこ

表5 「社会科の指導法」ルーブリック

評価/項目	5	4	3	2	1
知識・技能	学習指導案略案の書き方に関する知識を習得し、資料や発問を工夫して10分間の模擬授業を行う技能を有している。	学習指導案略案の書き方に関する知識を習得し、資料や発問のいずれかを工夫して10分間の模擬授業を行う技能を有している。	学習指導案略案の書き方に関する知識を習得し、10分間の模擬授業を行う技能を有している。	学習指導案略案の書き方に関する知識を習得しているが、10分間の模擬授業を行うことができない。	学習指導案略案の書き方に関する知識を習得しておらず、10分間の模擬授業を行うこともできない。
<u>評価の理由</u>					
事前					
事後					
思考力・判断力・表現力	社会科授業に関して必要な事柄を深く思考・判断し、児童の立場に立った授業として分かりやすく表現する力を有している。	社会科授業に関して必要な事柄を適切に思考・判断し、児童の立場に立った授業として分かりやすく表現する力を有している	社会科授業に関して必要な事柄を自分なりに思考・判断し、児童の立場に立った授業として表現する力を有している	社会科授業に関して必要な事柄を自分なりに思考・判断しているが、児童の立場に立った授業として表現する力を有していない。	社会科授業に関して必要な事柄を自分なりに思考・判断しておらず、児童の立場に立った授業として表現する力を有していない。
<u>評価の理由</u>					
事前					
事後					
学びに向かう力・人間性	社会科授業を行うにあたって、情報を進んで収集したり、工夫を加えたりしてよりよい授業を目指そうと学んでいる。	社会科授業を行うにあたって、情報を収集か授業の工夫のいずれかを行い、よりよい授業を目指そうと学んでいる。	社会科授業を行うにあたって、自分なりによりよい授業を目指そうと学んでいる。	社会科授業を行うにあたって、情報収集をしているが、授業の工夫を行っていない。	社会科授業を行うにあたって、情報収集も授業の工夫も行っていない。
<u>評価の理由</u>					
事前					
事後					

4.2 「音楽科の指導法」におけるルーブリック作成の実際

(1) 本講義の目標

新学習指導要領では全教科統一の評価規準となり、従前より大幅な変更となった。これを受け、「音楽科の指導法」では、新学習指導要領の評価3観点に対応させ、次の目標を設定した。

【知識・技能】 音楽科学習指導案の書き方および歌唱共通教材24曲を理解するとともに、表したい音楽表現を授業で展開するための技能が身につく。

【思考力・判断力・表現力】 音楽表現を考えて表現に対する思いや意図を持ち、授業づくりに必要な事柄について判断し、歌唱指導や模擬授業として実施することができる。

【学びに向かう力・人間性】 協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、様々な音楽に親しむとともに、主体的に歌唱指導および模擬授業に参加することができる。

これらの評価の観点により、知識や実践力、そして指導の抽斗を備えた小学校教員を養成することが最大の目標である。なお、評価については、学生が歌唱指導および模擬授業の実践を行う場面があり、その評価が50%を占めている。残り50%が筆記試験による評価となることから、本研究は主に前者の50%が該当する。

(2) ルーブリック作成の意図

表6に示す本講義のルーブリックは、松下らのルーブリックレベルの設定方法のうち、「動詞型」と「形容詞・副詞型」の融合とした。「音楽科の指導法」の特性は、15回の講義で歌唱共通教材について理解し、指導技術を身につけるとともに、様々な音楽に親しみながら学べる授業プランを作り上げ、模擬授業として実施することができるようにする点にある。そこで、評価の3観点で評価の様子を表す文章の表現方法が異なることから、主に結果を問う**【知識・技能】**においては「動詞型」、主に程度や内容を問う**【思考力・判断力・表現力】**と**【学びに向かう力・人間性】**においては「形容詞・副詞型」を選択した。いずれも5段階評価とし、最高の「5」を到達目標と同一とした。そして、到達目標に向

かって、評価が「1」の段階から次第に望ましさの程度が高まるようにした。

例えば**【知識・技能】**では、①歌唱共通教材の理解および②音楽表現の指導技術と、大きく2つのことが書かれている。前者の歌唱共通教材は24曲あり、これらについて学習指導要領の指導範囲の最後の番まで譜面を見て歌えるか、また歌詞の意味の把握や強弱変化等を理解しているか、以上2点を視野に入れている。また、後者の音楽表現の指導技術については、ピアノ伴奏やリコーダー演奏といった演奏技能や、楽器を児童に見せながら指導するといったテクニックも含めている。これらの技能については結果等の状況を評価することから、「動詞型」の言葉を用いることとした。実際に使用した「身につけていない」(1と2の文末は同一)「必要性を理解している」「身につく」「身につく」の言葉にあるように、評価の望ましさの程度を次第に高めていくようにした。

残りの**【思考力・判断力・表現力】**と**【学びに向かう力・人間性】**では、動詞に付随する形容詞や副詞を用いることにより、到達の程度や内容を読み取るのに適すると判断し、「形容詞・副詞型」を用いることとした。例として「参加できない」「参加しようとする」「参加する」「主体的に参加できる」「協働して主体的に参加できる」という5段階を設定し、同じ「参加する」の動詞を用いつつも、形容詞や副詞により評価の望ましさの程度を次第に高めていくようにした。

これらの意図から、「音楽科の指導法」ルーブリックは作成された。実施の前に、音楽科に関する確認テストを行うこととした。これは、15回の講義で学ぶ内容について、講義開始前ほどの程度理解しているのか、また15回目にはどの程度まで理解が深まったかを学生自ら気づくようにし、ルーブリックに反映できるようにするためである。1回目と15回目は同一の確認テストを行うこととする。また、このルーブリックを応用し、模擬授業の相互評価にも活用することを想定している。これらの活用により、学生が向上心を持って学習を行うことに期待したい。

表6 「音楽科の指導法」ルーブリック

評価項目	5 (到達目標)	4	3	2	1
【知識・技能】	音楽科学習指導案の書き方および歌唱共通教材24曲を理解するとともに、表したい音楽表現を授業で展開するための技能が身につく。	音楽科学習指導案の書き方および歌唱共通教材24曲をおおむね理解するとともに、表したい音楽表現を授業で展開するための技能が身につく。	音楽科学習指導案の書き方および表したい音楽表現を授業で展開するための技能の必要性を理解しているが、歌唱共通教材24曲について半分程度しか理解できていない。	音楽科学習指導案の書き方および歌唱共通教材24曲は半分くらい理解できるものの、表したい音楽表現を授業で展開するための技能が身につけていない。	音楽科学習指導案の書き方および歌唱共通教材24曲を理解できておらず、表したい音楽表現を授業で展開するための技能が身につけていない。
【思考力・判断力・表現力】	音楽表現を考えて表現に対する思いや意図を持ち、授業づくりに必要な事柄について判断し、歌唱指導や模擬授業として実施することができる。	音楽表現を考えて表現に対する思いや意図を持ち、授業づくりに必要な事柄について考え、歌唱指導や模擬授業としておおむね実施することができる。	音楽表現や授業づくりに必要な事柄について考え、歌唱指導や模擬授業としてつまずきがあるものの実施することができる。	音楽表現や授業づくりに必要な事柄について考えられないものの、歌唱指導や模擬授業として教員の補助を借りながら実施することができる。	音楽表現や授業づくりに必要な事柄について判断することができず、歌唱指導や模擬授業が成立しない。
【学びに向かう力・人間性】	協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、様々な音楽に親しむとともに、主体的に歌唱指導および模擬授業に参加することができる。	様々な音楽に親しむとともに、主体的に歌唱指導および模擬授業に参加することができる。	様々な音楽に親しみながら、歌唱指導および模擬授業に参加することができる。	協働して音楽活動をする楽しさをあまり感じることができないものの、様々な音楽を聞きながら、歌唱指導および模擬授業に参加しようとする様子が見られる。	協働して音楽活動をする楽しさを感じるなどの親近感がなく、主体的に歌唱指導および模擬授業に参加することができない。

4.3 「英語活動の指導法」におけるルーブリック作成の実際

(1)本講義の目標

「英語活動の指導法」は、「英語活動概論」「英語活動教材研究」とともに小学校英語教育関連講座であり、英語教育に必要な知識と指導力を備えた小学校教員を養成することをねらいとしている。その概要は「英語活動概論」で学習した基礎知識を踏まえ、①外国語活動の授業で用いられることが多い活動や教材・教具を実際に体験しながら学ぶ、②活動例と同時に関連した教室英語を学ぶ、③今後、開始学年や授業時数等に変動がある現状を踏まえ、児童の年齢に応じて活動例や教材を工夫することができるように学習を進める、こととし、実践的な指導力の

獲得を目指す。履修学生の学びは、定期試験およびミニ・レッスンの立案と実施、授業参加度を総合的に評価する。よって、定期試験を除く、「活動案」「活動実施」「教室英語」「授業貢献度」の4つを学生が自らの学習状況を把握するためのルーブリック評価項目とした。

(2)ルーブリック作成の意図

表7に示す本講義のルーブリックは、松下らのルーブリックレベルの設定方法のうち、「形容詞・副詞型」によって作成された。「英語活動の指導法」の特性は、15回の講義を通して様々な教材・教具と教室英語を学習し、指導技術を修得するとともに、ミニ・レッスンを立案し、実践できるようにする点にある。また、授

業方法においては、活動例の利点や留意点、どの学年に相応しく、どこを工夫すれば他学年での使用が可能になりそうか等、学生が自ら考え、積極的に意見を述べることを重視しているといった特徴がある。そこで、前述の4つをルーブリック評価項目にしたが、いずれの項目もレベル化するのに十分な条件や具体的な数量を持たないため、形容詞・副詞を使って表現することが妥当であると判断し、「形容詞・副詞型」を選択した。

例えば「活動案」では、①立案したミニ・レッスンが指導対象児童に適していること、②活動案を多くの人が活用しやすいように提供できること、の2つの条件しか含めていない。同様に、「活動実施」の場合は、①対象児童に合わせて立案された活動案が外国語活動に関する基礎知識を踏まえたものであること、②立案した活動案を実施できること、「教室英語」の場合は、活動案実施において教室英語を使っていること、「授業貢献度」の場合は、外国語活動に関して自分の考えを自主的に発言してクラス全体の学びに貢献していること、とどの評価項目においても設定した条件は1つあるいは2つのみである。

レベル化するには、「5」を到達目標として、レベルが下がるにつれ形容詞・副詞を使って徐々に肯定的から否定的な表現で到達程度を提示し、「1」がまったく学習が進んでいない状況を示す。「教室英語」を例にとると、「正確に」「分かりやすく」「十分に」使用できるレベル5から、「分かりやすく」「十分に」「時々間違っ」て使用しているレベル4、「十分に」だが「間違いが目立って」使用するレベル3、「限られた」使用にとどまるレベル2、「使わない」レベル1、といった具合である。

次期学習指導要領は「何を学ぶか」に加え「何ができるようになるか」という視点で改善されるという。本講義においても、例えば指導法や教室英語を知識として理解するだけでなく、これまで学習してきた外国語活動の基礎知識とともにミニ・レッスンの立案や実践の際に十分に活用できることを望む。今回のルーブリック評価項目と5段階の基準を提示することで、履修学生が本講義を通して何を学習し、何ができるようになることを求められているのかを認識しながら学習を進め、少しでも高いレベルで学習目標が達成できることを期待したい。

表7 「英語活動の指導法」ルーブリック

評価項目	5	4	3	2	1
活動案 (対象児童に適したレッスンプランを立案し、他者も利用しやすく提案できるか)	対象児童に適したミニ・レッスンを立案し、多くの人が活用しやすいように教材情報や活動の利点・留意点を含めて内容を整理し、提案できる	対象児童に適したミニ・レッスンを立案しているが、教材情報などの活用のための情報が不十分である	対象児童に適したミニ・レッスンを立案しているが、活用しやすい内容にまとめられていない、もしくは分かりにくい	ミニ・レッスンを立案したが、対象児童に適した内容ではない	ミニ・レッスンを立案し、まとめることができない
活動実施 (対象児童に適したレッスンプランを立案し、実践できるか)	外国語活動に関する知識を理解した上で、対象児童に適したミニ・レッスンを立案し、十分に実施できる	外国語活動に関する知識を理解した上で、対象児童に適したミニ・レッスンを立案し、ある程度実施できる	外国語活動に関する知識を理解した上で、対象児童に適したミニ・レッスンを立案したが、実施できない	外国語活動に関する知識を理解した上でミニ・レッスンを立案しようとしているが、対象児童に適した指導内容になっていない	ミニ・レッスンを立案し、授業を実施することができない
教室英語 (教室英語を使いながらミニ・レッスンを進めることができるか)	正確かつ分かりやすい教室英語を十分に使って授業をしている	分かりやすい教室英語を十分に使って授業をしているが、時々間違った使用がみられる	教室英語を十分使って授業をしているが、間違った使用が目立つ	限られた教室英語のみ使って授業をしている	教室英語を使わない
授業貢献度 (授業内容に関して自分の考えを発言し、クラス全体の学びに貢献しているか)	授業内容や関連する事柄に興味を持ち、自分の考えを自主的に発言し、クラス全体の学びに常に貢献している	授業内容に興味関心を持ち、自分の考えを自主的に発言し、クラス全体の学びに時々貢献している	指名されれば、自分の考えを発言し、クラス全体の学びに貢献している	指名されれば自分の考えを発言するが、クラス全体の学びに貢献するレベルには達していない	指名されても自分なりの考えを発言しない

4.4 「教育情報」におけるルーブリック作成の実際

(1)本講義の目標

2020年度から施行の学習指導要領を概観すると、総則の第3. 教育課程の実施と学修評価の1. 主体的・対話的で深い学びの授業実現に向けた授業改革の中に次の様な記載がある。「情報活用能力の育成を図るために、各学校において、コンピューターや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、

これらを適切に活用した学習活動の充実を図ること。また、各種の統計資料や新聞、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること」とある。加えて、平成23年度に文部科学省より公表された、教育の情報化ビジョンー21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指してーに記載されている「子どもたちに1人1台の情報端末環境を整備すること」という内容を併せて考えると、2020年度からの指導は、1

人1台端末の情報環境が前提となっている。この環境に適した指導方法や学び方に関する実証試験として、文部科学省の学びのイノベーション事業や総務省のフューチャースクール推進事業などが挙げられる。これらの実証試験の結果から、新しい指導方法や学び方に関する効果や課題が明らかになってきている。加えて、2020年度からの学習指導要領では、各教科の特質を生かしつつ、教科等横断的な視点から教育課程の構成を図る項目の中で、情報活用能力(情報モラルを含む。)が挙げられている。本講義では、これらの新しい指導方法や学び方に対応できる教員の養成のためのルーブリックを作成する。

(2)ルーブリック作成の意図

表8に示す本講義のルーブリックは、松下らのルーブリックレベルの設定方法のうち、「条件型」によって作成された。「教育情報」の特性は、授業づくり未経験の学生が15回の講義で授業ができるようにする点にある。そこで、条件型であれば、講義の進捗につれてクリアすべき条件や課題を増やしていくことによって、目標達成の度合いを学生自身が理解できると判断したため、「条件型」を選択した。ルーブリックの基本的な構造は、5段階評価とした。さらに、教員養成を背景としているため、指導するという点を重視している。そのため、5段階評価の最上位である第5項目は、「指導ができること」

とした。そして、第4項目から下がるに従って、技能を身につけている、技能を修得する意欲がある、知識を獲得しているとした。なお、第1項目は、知識が無い状態であることとした。

本講義で作成するルーブリックは、2020年度から施行の学習指導要領を背景としており、情報機器を活用した授業の実施を考慮しているが、指導する場の情報設備に応じて指導可能な内容に変動がある。文部科学省などが実施した実証試験によると、児童側の情報機器としては、タブレット端末を児童に1人1台配布する。教員側の情報機器としては、プロジェクターやプラズマテレビなどの大画面表示機、ノートや実験機材などを映せる実物投影機、画面に直接書き込みが可能な電子黒板などがあげられる。また、児童と教員のコミュニケーションを促進するシステムや児童同士の協同学修を推進するためのシステムが導入されているケースもある。これらの現状を考慮して、表8に示すルーブリック中の評価項目を設定した。ただし、コンピューターへの入力については、スタイラスペンやタッチペンなども存在するが、児童がほとんど指導せずに利用が可能と判断されるため、キーボードからの入力であるブラインドタッチを項目に採用した。なお、キーボード入力に関する項目は、知識との関係が少ないため、第1項目と第2項目から技能に関する項目としている。

表8 「教育情報」ルーブリック

評価項目	5	4	3	2	1
キーボードによる入力	4に加えて、キーボードによる入力を他者に指導することができる	ブラインドタッチ（タッチタイピング）ができる	ブラインドタッチ（タッチタイピング）を習得しようとしている	キーボードを利用して、文字を入力することができる	キーボードを利用した入力ができない
教材（統計資料、新聞、視聴覚教材、デジタル教科書など）の適切な活用	4に加えて、デジタル教科書を利用した授業を設計・実施することができる	3に加えて、デジタル教科書を適切に操作することができる	2に加えて、実際にデジタル教科書を利用しようとしている	デジタル教科書の概要を説明できる	デジタル教科書の概要を説明できない
実物投影機の使い方	実物投影機を利用した授業を設計・実施することができる	3に加えて、実物投影機を適切に利用することができる	2に加えて、実物投影機を利用しようとしている	実物投影機の概要が説明できる	実物投影機の概要が説明できない
電子黒板の使い方	電子黒板を利用した授業を設計・実施することができる	3に加えて、電子黒板を適切に利用することができる	2に加えて、電子黒板を利用しようとしている	電子黒板の概要が説明できる	電子黒板の概要が説明できない
初等教育における授業支援システムの使い方	授業支援システムを利用した授業を設計・実施することができる	3に加えて、授業支援システムを適切に利用することができる	2に加えて、授業支援システムを利用しようとしている	授業支援システムの概要が説明できる	授業支援システムの概要が説明できない
情報モラル	4に加えて、情報モラルを他者に指導することができる	3に加えて、情報モラルに沿った行動をしている	2に加え、情報モラルに沿った行動をしている	情報モラルに関する知識はある程度ある	情報モラルに関する知識がない

5. おわりに

本研究では、大学の小学校教員養成課程の講義において使用するルーブリックを作成した。その手順として、まず、2020年度から実施される学習指導要領の認識を著者らで議論し、次に、各教科等の担当者が素案を作った。最後に、著者らで素案のピアレビューを行った。ルーブリック作成に当たっては、先行研究で明らかになったいくつかのルーブリック作成の型から、松下ら（2015）が示したルーブリックの型を参考にルーブリック作

成にあたった。実際に使用した型は、「条件型」「動詞型」「形容詞・副詞型」の3つであった。松下らのルーブリック作成手法は、学生が取り組む活動を重視する「社会科の指導法」、「音楽科の指導法」、「英語活動の指導法」、「教育情報」の4つの講義で活用が可能であることが示唆された。

一方で、ルーブリック作成段階で厳密にはどれか一つの型で達成度合いを数段階にレベル化するのは難しく、いくつかの型を複合的に用いて構成を行った。副詞を使って望ましさを表現する「形

容詞・副詞型」は「条件型」と比較すると、レベル差の解釈に個人差が生じる可能性が危惧されるため、学生に導入する際には十分な説明が必要であると思われる。また、評価段階で2と3の表記が類似するなど、評価の段階の設定に困難さがあった。

学期初めにルーブリックを配布し、その時点での知識・技能レベルを学生に自己評価してもらったことは、学習開始時には学生の大半が未学習・未経験であることが容易に予測される。だが、全ての履修学生がレベル1から学習をスタートさせるとも限らない。ルーブリックの活用は、どのレベルから学習を開始した場合でも、学習者が到達目標と照らし合わせ、自己の知識・技能のレベルと比較しながら、その向上に努めるための方策としても有効であると考えられる。学生自身が導入時に自己評価することから、学生は今までよりも明確な目標をもって講義に臨むことが期待できると考える。

一方で、今年度より本学において全講義にてルーブリック評価を実施することから、学生にとって負担にならないかなどについても検討の余地がある。

今後の方針として、講義ごとに学生がこのルーブリックを活用し、成長する過程について調査・分析を行う。さらに、学生の知識・技能の修得度の指標となる定期テストや発表などと、ルーブリックの比較を行う予定である。

参考文献

- (1) 文部科学省 (2016) 大学教育部会 (第26回) 配布資料, 1. 大学教育の質的転換・質保証
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/061/siryo/_icsFiles/afiedfile/2016/02/01/1366444_6_2.pdf(2017年4月26日閲覧)
- (2) 濱名篤 (2012) ルーブリックを活用したアセスメント
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/... (2017年4月26日閲覧)
- (3) 東北福祉大学 (2017) コモンルーブリック.
<https://www.tfu.ac.jp/students/rubric.html>
(2017年4月26日閲覧)
- (4) 文部科学省 (2017) 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm
(2017年2月14日閲覧)
- (5) ダネル・スティーブンス・アントニア・レビ, 佐藤浩章監訳・井上敏憲・侯野秀典訳 (2014) 大学教員のためのルーブリック評価入門. 玉川大学出版部. p2.
- (6) 小西友七, 安井稔, 國廣哲彌 (1981) 〈デスク版〉小学館英和中辞典. p1544.
- (7) 高浦勝義 (2004) 絶対評価とルーブリックの理論と実際. 黎明書房. p76.
- (8) 安藤輝次 (2008) 一般的ルーブリックの必要性. 奈良教育大学教育実践総合センター紀要. 1-10. www.nara-edu.ac.jp/CERT/bulletin2008/CERD2008-R01.pdf
(2017年4月20日閲覧)
- (9) Just system(2017) 見える「評価」で授業が変わる～ルーブリックで授業づくり～第1回ルーブリックとは. 関西大学総合情報学部教授黒上晴夫先生.
http://www.justsystems.com/jp/school/academy/hint/rubric/ru01_01.html
(2017年3月13日閲覧)
- (10) 沖裕貴 (2014) 大学におけるルーブリック評価導入の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—. 立命館高等教育研究14号, 71-90
- (11) 前掲 (10) P84.
- (12) 前掲 (10) P86.
- (13) 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著 (2015) デイープ・アクティブラーニング. p180.

Practical Application of Rubric in the Teacher Training Course at University

Kazumi MIURA*, Yoshikazu WATARAI*, Megumi ISE*, Yuichiro YAMASHITA*

*Tohoku Fukushi University Faculty of Education

ABSTRACT

Recently, using rubric to support student learning in higher education is highly recommended (MEXT, 2016). In the context of universities offering teacher training courses, demonstrating the practical use of rubric is particularly an urgent issue to familiarize students with this relatively new assessment for their future career as teachers. While many universities set common rubric for all the lectures, teachers can also create one peculiar to their own classes. However, examples of rubric for each subject are still limited, and teachers may not always possess enough knowledge of creating rubric. Therefore, in this report, we will present four rubrics we designed for four different subjects (Social Studies Education, Music Education, English Education, and Educational Informatics) in the elementary school teacher training course at the university. In designing, Matsushita et al.'s (2015) rubric patterns were referred.

Key words: University Education, Elementary Teacher Training Course, Rubric Development, Subject Teaching Methods, Educational Informatics